



大塚麻美、ステップスギャラリー初個展である。大塚は1984年茨城県生まれ、2009年東北芸術工科大学大学院芸術工学研究科修士課程修了。2007年から東京を中心に個展を行い、グループ展にも積極的に参加している。

大塚は今回、中型の作品7点、小品を6点出品した。所謂油彩を学んできたが、作品はパネル、和紙、アクリル、ペンと混合技法を用いている。今回の作品群から、様々な技法を模索する大塚の姿が浮彫となる。

大塚の技法で最も特徴的なのは線香で和紙を燃やし、穴を空けることにある。大塚には紙を焼きたい衝動や偶然に身を委ねる意図があるのかもしれないが、私は異なる見解を示したい。

私達は余程でない限り、制作を画材づくりから始めない。つまり、和紙を漉く、絵具を岩から削る、毛から筆をといった具合に。すると、全て既存の材料、レディメイドに頼っていることになる。既製品は完成しているように感じる。現代美術作品の真の完成とは支持体に顔料が乗せられた瞬間ではなく、我々の命と同様、消滅した時ではないか。

すると大塚の作品は和紙が焼かれることによって、既に完成の領域に近づくこととなる。そして一部の作品の場合には、和紙は描かれ、塗られては幾度となく貼り付けられ、幾層もの視覚を内在化していく。

上の写真は右下の作品のアップである。焼かれて穴が空いた和紙は描かれ、重ねられ、ところによっては、一番下に貼り付けられた金箔を目にすることができる。穴に穴が重なっている箇所が面白い。

我々が住む次元と異なる次元とを行き来するために、空間にはワームホールが開いているという。大塚にその意図はないだろうが、私はこのワームホールが開かれ、塞がれている作品の細部に目がいくのである。山に聞くと、応えてくれるのは山彦であり、声という実体は消滅するのだ。

